

---

# 木枯らし男

桐生星男

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

木枯らし男

### 【Nコード】

N9720C

### 【作者名】

桐生星男

### 【あらすじ】

木枯らし男と、二人の幼い兄妹の物語

## はじまり

木枯らし男がやってきた。

今年もまた子供たちは、

この風変わりな格好をした皮肉顔の男と、  
ひと冬かぎりの旅をする。

「さあ、むかえにきたよ」

木枯らし男は言った。

窓から見える月は、ちょうど東のやまの端から顔を出して、あたりを青白く照らしていた。

「寒くはないかい？」

開けはなした窓からは、木枯らし男のひんやりとした冷たい空気が流れ込んできた。

またあの冒険が始まる。

パジャマ姿の兄と妹は、期待に目を輝かせて息を大きくすった。

「よしよし。覚えてるね、いい子たちだ。さあ、手をつないで。行くよ、そら」

ひととき大きな風がふいて、子供たちの体がふわりと宙に浮いた。

「わあ」

幼い妹はおもわず声をあげた。

「いいー、と兄は、妹のくちびるに指をあてて言った。

「父さんと母さんが起きちゃうよ」

母さんが起きてきたら、きつとこう言うに違いない。

あらあら窓なんか開けて、風邪ひいちゃうわよ、いい子だからもう、おとなしく寝なさい、と。

せつかく木枯らし男がやってきたというのに、おとなしく寝てなんかいられるもんか。

木枯らし男はそんな兄の気持ちを察したのか、皮肉顔をゆがめてニヤリと笑った。

「だいじょうぶさ、さつき窓から部屋をのぞいてみたが、それはもう、ふたり仲良くぐっすりと眠っていたよ」

「人間を観察してみようと思うんだ」

送電線をくぐって、月明りに照らされた町へと一直線に飛びながら、木枯らし男は叫んだ。

兄も幼い妹も、手を離して吹き飛ばされないように、木枯らし男の腕にぎゅっとつかまった。

幼いふたりの兄妹は、この素敵な夜の景色を見逃さないように、しっかりと目を見開いた。

上空から見下ろす景色は、近くのは早く、遠くのはゆっくりと、

風と共にぐんぐん後ろのほうへ流れていく。

とても静かな夜だった。

ボウボウボウと風の音が鳴った。

月がいつまでも、三人のあとをついてまわった。

「僕は人間が、好きなんだ」

§1 - 1 木枯らし男が人間の女の子に恋をした

その年の夏は、いつもより長く、暑かった。

おかげで秋はほんの少ししかなくて、

山のもみじたちは大急ぎで、赤や黄色の衣装に着替えなくてはならなかった。

「世の中にはセツリつてものがあるものだわ」

山の中腹の小川のそばに立つカエデが赤く色づきながら言った。

「一年に一度の見せばを、こんな風にはたばたと迎えないといけないなんて」

カエデはいかにも不満そうに、ぶつぶつとつぶやいた。

「まったくですわ」

山頂付近で黄色く色づこうとしていたブナも同意した。

普段は何かといがみあっていたカエデとブナだが、ふたりともその年の猛暑には、心底うんざりしていたのだ。

「もっとゆつくり色っぽく、見る者すべてがうつとりするよう色づくのが、私のポリシーですのに」

「なにもかも、人間のカンキョウオセンが悪いんですわ」

「私たちの身にもなってほしいものですわ」

「そうですわ、そうですわ」

イチヨウや山ツツジも話に加わって、山のもみじたちはにぎやかに、不平をこぼしながらも楽しそうに、秋の衣替えを急いだ。

「人間と言いますとアレですな」

金色に色付いた稲穂のあいだを飛んでいた赤とんぼが、話に割り込んできた。

「もうすぐ木枯らし男さんのやってくる季節じゃありませんか。今年はどうなみやげ話を持ってきてくれるのか・・・」

いつもながら、たのしみ・・・うん。たのしみですな」

赤とんぼは小川のそばをせわしなく行き来しながら、北のほうの空を眺めた。

冬はもうほんの、すぐそばまで来ていたのだ。

「あらあ、赤とんぼさん。あなた、何か勘違いなさってませんか？私たちが山のもみじは、木枯らし男のことなんか、

これっぽっちも好きじゃありませんのよ」

カエデがおもしろそうに言った。

「来てほしくなんかありませんわ」

言いながらカエデは、また少し、赤く色づいた。

「ああ、そうでした、そうでしたな。これはこれは、失礼失礼。」

赤とんぼは、何もかも承知しているといったふうに、うんうんとうなずいた。

「まあ、なんとというか、あの方もあなた方も大変ですな」

秋が深まり冬がやってくると、山のもみじたち自慢の色とりどりの衣装は、

荒々しく飛びまわる木枯らし男の手によって、すっかりと剥ぎ取られてしまう。

素っ裸にされた山のもみじたちは、そのことをいつもとても残念に思うのだが、

おかげで次の年の春、透きとおったきれいなきみどり色をした新緑が枝のそこらじゅうに芽吹いてくると、

木枯らし男のことを頼もしく思い起こすのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9720c/>

---

木枯らし男

2010年10月28日05時56分発行